

羽前金峰山の信仰

□庄内地方に於ける金峯山

- ・海拔458m、東に羽黒山、東南に月山と湯殿山、北に島海山、西に日本海を望む山。(『山形県』文昭社)
- ・鶴岡を去ること西南一里、海拔四五八米にすぎず、さして高い訳ではないが、眺望頗るよく庄内平野を一望のもとに眺め、日本海に打ち寄せる白波を脚下に見下す事が出来る。又平野か海から眺めると摩耶、母狩、金峰の三山が突然屏風を立てた様に一線を画しているのが眼に入る。(『黄谷村史』黄谷村史編纂委員会)

□国指定名勝地認定理由

- ・金峯山内の上・中・下位からの景観が異なり、しかも頂上に至つては庄内地方が一望でき、その景観は絶景で我が国展望の壯観として稀有である。(『つるおか文化財散策』鶴岡文化財協賛会)

□山名 蓮華峯・八葉山

- ・縁起によれば、一番嶽を八葉山と云う。青白の蓮華生ずることから山名となる。

当山表口(青龍寺)のほか長瀧・瀧澤・藤沢・高坂・新山の口々が有り、順逆両峰の道を加えて八葉にかたどる。尚このほかに青白蓮華の秘説がある。(『金峰山萬年草(下)』本社) 1727年遷化の南頭院(慶應)

※縁起によれば、一番山を阿弥陀峰という。(『金峰山萬年草(上)葉分山』)

- ・一書によれば、慈覚大師は承和十四年(847)唐より帰朝し、中略、蓮華峯に登り尊容を親拝にする。

(『金峰山萬年草(下)』本社)

・日記によれば、坂上田村麻呂が再び東北の蝦夷征伐を行った延喜十四年(795)と同二十年(801)に、東方の神靈の地に祈る。この時蓮華峯に奇瑞めでたいこの前兆としての不思議なるしがあり、到る処の凶徒を悉く皆雌伏屈服する。(『金峰山萬年草(下)』本社)

*八葉山の八葉とは八枚の花弁を持つ満開の蓮華の姿を意味し、蓮華を持物とする仏は観音菩薩である。ここから観音菩薩の座す山をあらわした言葉。

※観音という名は、苦悩する民衆が苦難からの助けを求めるとき、その音声を聞いて即座に民衆の苦難を救済するところからの名である。(『仏教』望月信成他二名著)

※悟りへの道を追求し、悟りの境地の象徴としての浄土の信仰を中心としていた大乘仏教のほとけと比べると、観音は全く異なる性格で密教的現世利益が感取される。(『日本密教』佐和隆研著)

※観音の持物である八弁の蓮華は、女性の生殖器官の象徴的表現である。また観音の持物の水瓶は子宮を意味し、母女神の表徴でもある。自然の生産力は人間の生殖力、とくに女性の生殖力の模倣また感染によって確保され、高められるという呪術的考えを示している。蓮華はまた水から生まれたものとして水生とも呼ばれ、水のシンボルでもある。蓮華(女性生殖器)とは、汲めども尽きぬ豊饒と富と生命の本源なのである。(『密教の神々』佐藤任著)

*青白の蓮華

※女性の観音として有名なものに多羅觀世音がある。多羅とは仏典で眼精とされ瞳のことである。この多羅菩薩は観音の眼より放つ大光明の中から生じた尊であるとされる。その形姿は『大日経』では「青白色相離る。中年女人の状にして合唱して青蓮を持ち、日光遍くして、嘩笑猶を浄金の如く、微笑して鮮白衣なり」と描写している。『大日経疏』では「觀自在は三昧仏の供養なので女人の姿に作せ。青蓮は清浄無垢の義で、普眼により群生を攝受することから不老不少の中年の女形に作せ」とある。眼精とは発光物を意味している。(『密教の神々』佐藤任著)

□山名 金峰山

・一書によれば、承暦年中(1077~80)、和州宇多郡城主丹波守盛宗が出羽國に移り、吉野の金峯山を此の処に勧請する。(『金峰山萬年草(下)』本社)

・金峰山は黄金産する故である。（『金峰山萬年草下』本社）

*吉野金峯山の位置

・紀伊半島の中央部、北は吉野から南は熊野に至る大山塊を大峯山と呼び、修験道の権威発展のはじめの地とされる。『万葉集』では吉野山は「御金の嶺」と詠まれ、吉野の奥山は金御嶽といわれた。山上ヶ岳（二七一九メートル）を単独で金峯山と呼んでいた時期もある。江戸時代には、山上ヶ岳を大峯山と呼ぶようになった。

（『山岳信仰』鈴木正彦著）

※大峯山は、近世以前には「山上」と呼ばれていた。「山上」とは金峰山の山上という意味で、下山（山下）は北麓の金峯山寺蔵主堂のことである。（正確には吉野山という山ではない）「山上ヶ岳」という山名ができたのは明治期以降のことで、「山上ヶ岳」を「大峯山」と呼ぶようになったのは、近世にも「大峯山上」という表現があったことや、山頂の山上蔵主堂が、明治期以降の管理体制の発見によって「大峯山寺」と称されるようになったことなどが要因であると考えられる。（『山岳修験の招待』小田匡保著）

*吉野金峯山の信仰

①祖霊のこもれる山・祖霊光物説

金御嶽を神奈備（祖霊のこもれる山として信仰する山岳信仰はここから開けたものと推定される。古代の日本人は山を「神の霊（ひ）」のこもれる場所として信仰した。しかもその神の霊も神奈備とするのが最も古い形である。それは死者を山に送って風葬する古代葬制儀礼の反映と思われ、山は死者が赴く他界と観念された。山に赴いた霊魂は目に見えないけれども、しばしば「魂の火」として人魂や鬼火で姿をあらわすと信じられ、ここに集まる祖霊を光物として表現した。（『山の宗教』五来重著）

②水分の山・祈雨

水神は貴船や丹生川上のような龍神として湖畔や水辺に祀られる場合と、水分神として分水嶺をなす山頂に祀られる場合がある。山頂に祀られる場合、水の神は同時に山の神であって、農耕にあたっては田の神として水口にも祀られる。古代の祈雨が名山霊岳にたいして行われ、雨乞が山頂に登って行われるのも、山の神の水神的性格に基づくものと言える。文武二年（六九〇）四月二十九日の『続日本紀』には、「馬を芳野水分峯の神に奉る。雨を祈ればなり」とあり、天皇が貴根ヶ峯（八五八メートル）の泉下に位置する宮滝の吉野宮に行幸することが水神信仰から出たものとするならば、金峯山を対象として祈雨することになる。（『山の宗教』五来重著）

※祈雨祈晴の馬・身では年月は陽の気の極致ではあるが、夏至を境に一陰はじめて萌し、陽射しも日毎に短くなっていく。そこでこの一陰を水とすれば、火気の最も盛んな午馬にぞ、水の始まり、水の萌しが見られる。『続日本紀』天平三年（731）十二月条には「神馬は河伯の精」とあり、馬を河神としている。河の源は一滴の水に始まるから、この河の相と、一陰つまり極微の水が萌す午月の象が重なり合って、馬が河伯とされるのである。このように、馬が水と深く関わりを持つからこそ、祈雨祈晴に馬が供献されるのである。しかも供献される神社も、大和から南、午方の吉野の丹生川上社の場合が多く、一陰の萌す象をもつ南方の社に奉納される。（『陰陽五行と日本の民俗』吉野裕子）

③金属と鉱山の山・金山説

・金御嶽の名称は金属との関係がある。奈良時代に日本の山岳信仰は神仙思想を中核とする道教の影響を受けて、山は不老長寿をもたらす金や水銀の埋蔵が信じられ、仙人の修行に祈ったという。吉野山の高嶺は貴根ヶ峯で、直下には地主神の金精大明神（金山毘古神）を祀る金峯神社が鎮座し、鉱山の神として崇められ、実際に鉱物が産出されていた。（『山岳信仰』鈴木正彦著）

・鎌倉末期の山伏伝承を記した『金峯山草創記』には、「この山は金を積んで山となしたもの」とあり、『相模大山寺縁起』には、「良弁僧正が東大寺大仏の鍍金の金を求めて金峯山の蔵主権現に祈ると、当山の金は弥勒菩薩出世のとき大地に鋪くためのものだからと断られた」とある。更に『日本書紀』や『扶桑略記』に載る吉野金峯山の開

創について、「欽明天皇十四年(五五三)に吉野寺放光像をここに安置した」とあり、現実の金の存在を暗示している。吉野山の高嶺青根ヶ峰の直下にある吉野金峯神社が古くは金精大明神と呼ばれたこと、祭神が金山彦・金山姫なのは、実際鉱物が産出されたからである。山伏の間には闇夜の地光によって鉱脈の有無を占相する方法があったらしいが、修験道と鉱山の関係がむすばれた要因の一つに、神仙思想を中核とする道教の影響がある。山は不老長寿をもたらす金や水銀が埋蔵されていると信じられ、仙人の修行の場と考えられていた。大峯系修験道が金剛蔵王権現という、仏教には存在しない仏をつくりだした理由も、埋蔵する金属を支配する王という意味であったのではない。鎌倉から室町に著された『沙石集』の巻二には、熊野修験は死ぬことを「金になる」といったという話を載せているが、山伏の隠語は実際の金属をさしていたと思われる。(『山の宗教』五葉重著)

以上のことから

修験道の栄えた山には不滅の聖火が灯されていた例は多く、これが山に集まる靈魂や始祖靈のシンボルとされていた。つまり山岳信仰が靈魂信仰によって支えられてきたということを示すとともに、この靈魂の祭を司る宗教者が「びじり」(火の管壁)であり、「びじり」の住む山を遠尋すれば光物があるというのは現実の景観でもあった。その霊場で修行した行者は、祖靈の靈力を身に付けて超人間的奇跡を行うのである。金峯山はこうした神奈備信仰に含まれた三つの面が、山上・中腹・山麓に分化し祀られたと考えられる。高嶺の青根ヶ峰直下の吉野金峯神社(山上)には鉱山の神である金山彦と金山姫を祀り、青根ヶ峰は北の象川・東の音無川・西の秋野川・南の黒瀬川の水源地で水分山であることから、その中腹に吉野水分神社(宇守神社)として水の神を祀る。そして吉野山の山麓にある吉野山口神社(勝手神社)には農民にとつての山の神である大山祇神を祀る。(『山の宗教』五葉重著)

* 吉野金峯山の開祖役小角(行者)

・文武天皇三年(六九九年)五月二十四日条「君役小角を伊豆嶋に配流した。小角ははじめ大和の葛木山に住んで呪術を駆使したので、朝廷から称賛されていた。そこで外従五位下の韓國連広足は、小角を師と仰いでいたが、のちにその能力を害せられたので、小角は妖術で人を惑わしていると偽りの訴えをし、そのため小角は伊豆嶋という遠隔の地に流されたのである。世間ではのちの世まで、小角は鬼神を使役して、水を汲ませ、薪を採らせ、鬼神が従わなければ呪術で縛り上げた」と伝えている。(『続日本紀』)

・上巻第三八話「役小角は賀茂役公(高賀茂朝臣)の出身で、大和の葛木郡上郡茅原郷で生まれた。生来、博学にして、仏法の信仰に篤く、常に修行に励み、夜な夜な雲に乗って大空を飛び回ったという。四十有余歳にしてなお巖窟に住み、葛を箸にし、そまつな着物をまとい、松の葉を食べ修行を続けた。さらに孔雀經の呪法を修め、験術を身に付けた。さらに鬼神を自在に駆使し、吉野の金峯山と葛城山の間には橋を架けさせた。このため、葛城山の一言王大神(一言のもとに言い放つ神で託宣の神が人にのり移り「役優婆塞私的に山中に入り修行を重ねる在家の修行者が陰謀を企て、天皇家を滅ぼそうとしている」と讒言事を曲げて伝える)と。朝廷はさつそく小角を捕えようとしたが、その験力にはかなわずうまくいかなかった。そこで小角の母を捕えると、彼は母を救うために、ようやく囚われの身になった。こうして伊豆に流された小角だったが、小角は水の上を走り回り、空を飛び、昼はおとなしく伊豆にいたけれども、夜になると抜け出し、駿河の富士山で修行をした。こうして三年の月日が流れ、大室元年(七〇二)正月、ついに仙人となって昇天したという。このうち、飛鳥元興寺の僧・道昭が唐に留学し新羅に赴いた際、たまたま「日本語」を話す人物と出会ったという。名を問うと、役優婆塞であることを明かし、そのまま姿を消したのである。(『日本書紀』)

※葛城嶋の神奈備にももる味相高彦根命(大己貴神)の御子の御碑は葛城嶋氏の祖霊で、これをまつる司靈司祭を職能とする役の民

* 吉野金峯山の主尊金剛蔵王権現

・役小角が金峯山上で末代(未来の世)にふさわしい悪魔降伏御鎮めるの仏を祈ったところ、最初に釈迦如来、次

に千手観音菩薩、その次に弥勒菩薩が現われるが、いずれも柔和な姿に満足せず退け、さらに祈りを籠めると最後に磐石の中より金剛蔵王が忿怒の像で湧出したので歓喜して崇め奉り、天空を飛んで着座した所に寺を建立した。山上ヶ岳の湧出岩が蔵王権現の出現したところである。(『金峯山秘密伝』)

※釈迦如来・仏教の開祖・死後の衆生を救済する仏 過去仏

※千手観音・千の手で全ての人の願いを見落とし、あらゆる手段を尽して救う仏 現世仏

※弥勒菩薩・釈迦入滅後この世に下生し、釈迦の教いに洩れた衆生を救済する仏 未来仏

・役行者が祈念すると最初に弁財天が現れたが、柔和な相として天河に退けると天川村の坪ノ内弁天、次に地藏菩薩が現れたので川上村の金剛寺に遠ざけ、最後に金剛蔵王権現が現れて守護仏とした。(『役者微業録』)

※弁財天・水神で才能・音楽・財宝を与えてくれる女神 現世仏

※地藏菩薩・死者を六道から救済し、極楽浄土に送り届ける仏。死者と生者を結ぶ仏 過去仏

*峰入り

・大峯山の場合は、吉野側を金剛界、熊野側を胎藏界として、吉野から熊野へ、熊野から吉野へと峰入りの修行を行い、金剛界と胎藏界を一本化し、金胎不二の悟りの境地に到達すると説く。山を金剛界、谷を胎藏界と見なして曼荼羅世界を歩くともいう。

修験は山の中心に胎藏界八葉曼荼羅の中台を設定して、山を胎内や子宮とし、峰入り期間は自らを胎内にいる赤子と観念する。母なる山に抱かれ、母が子どもを慈しみ育てるように成長する母胎回帰の思想とも言える。修験の儀礼は、山中の修行は妊娠から出産までの二七五日にちなむ七五日間の峰入りを理想として誕生と死を擬似体験し、死から再生へと蘇りを果たす。山は死後の世界であるとともに生まれる前の時空間とされ、非日常世界を体験する場となる。山を歩くことで峰々谷々の大地の靈力と一体化した。(『山岳信仰』鈴木基義)

・大峰の靈地として最も知られているのは「七十五摩」で、七十五はという数字は出生前の子どもが母の胎内にいる日数と観念されるもので、「摩」とは掛所・行場・宿所・秘所をあらわしたもので靈地ともされる。

番号は南の熊野から北の吉野への順で、第一から第三までは熊野三山、第七十五番は吉野川の柳ノ宿奈良原吉野町である。室町中期には本山派(天台宗)と当山派(真言宗)が確立されて教団化が進み、本山派は熊野から吉野へ向かう順峰を、当山派は吉野から熊野へ向かう逆峰を行った。順峰は從因因果迷いから悟りへ順を追っての修行、逆峰は從果至因悟りを開いた者が衆生済度のために身を落として苦しみをともにする修行と説明されている。(『山岳信仰』鈴木基義)

金峰山案内記 金峰萬年草 (上) 南頭院広慶(七七)著

序

神は東方に出で、仏陀は西方に現れる。吾山は垂迹神が少彦名神(医薬・穀物・まじないの祖)本地(仏)は釈迦如来(仏)の開祖、合わせて金剛藏主権現である。

本尊・藏主権現 本地・釈迦如来(過去仏)・千手観音(現在仏)・弥勒菩薩(未来仏)

青龍寺川

七十五 柳ノ宿 役行者小角の石像を祈る。上流に櫻ノ渡し、下流に梅ノ渡しと柳ノ渡しの三渡ある。

山伏水垢離を行う。心身浄清にして山上に登る。吉野神宮がある。(『天孝七十五 醍醐修修行記』)

・吉野から山中に入る前に吉野川の六田の渡りで水垢離をとって身体を清浄にする。吉野川は三途の川とみなされ他界遍歴への第二步を踏み出す。(『山岳信仰』鈴木正実著)

一の鳥居

神道に鳥居について伝授がある。当山にこの秘説がある。ともに天長地久の寿の門である。

“この神の鳥居のもとによし植えて 出入る人はよしやよろこぶ”

これは昔より目出度きためしの歌である。またこの辺りに秘水がある。大皇橋がある。

続日本紀に、中略、少彦名神が葦や菅を植えて国を固め、米作りを介したとある。

七十二 銅鳥居 発心門(悟りを求める心を授け)・一の鳥居・金峯山寺 (『天孝七十五 醍醐修修行記』)

・“吉野なる銅の鳥居に手をかけて 弥陀の浄土に入るぞうれしき” 秘歌を唱えてめぐる。

吉野と山上の間には発心門(銅の鳥居)、修行門(金峯神社)、等覺門(山上)、妙覺門(山上)の四つの門があり、四門出遊(釈迦が部の四方の城門で老人・病人・死人・出家者を見て人びとの苦しみを知り、出家を決意したという説話)になぞらえて、出世の場である他界に入りこむ。四門の作法は葬式を意味し、亡者とみなして供養する。新たな生を胎内に宿すと同時に自らも死んだと観念する。(『山岳信仰』鈴木正実著)

・たいていの修験の山の鳥居が偉容をほころぶことには、修験道と金属のつながりがかんがえられる。そして修験道には「不老不死性」あるいは「永遠性」というべき原理を金属の永遠性で表現していると思われる。

(『山の宗教』五来重著)

○発心門・人間的苦悩を解決しようと発心して聖なる世界に入る

縁橋

神仏との縁が永久不変であることからこのように名付けた。

※橋は現世と死後の世界の境界となり、異界、他界の入り口を意味する。

六所権現 (六所神社) 社人 佐々木民部・工藤式部

当山の鎮守(氏神)。往古は薄澤村に鎮座した。六所とは、古歌に「六所とは祇園(災除の神)・八幡(文武の神)・春日(雷神)・加茂(治水神)・稻荷(穀蠶神)・愛宕(火の神)と予め知っておくように」

祇園、八幡、春日、加茂、稻荷、愛宕を勧請し奉る。本地は三如来、三菩薩である。いわゆる、薬師如来(東方世界の教主・病を治す・怨霊調伏)・阿弥陀如来(西方世界の教主・死後の安寧を約束)・釈迦如来・勢至菩薩(知恵の力で迷いから救う・観音とともに阿弥陀を護る)・観音菩薩(慈悲の心で救う・勢至とともに阿弥陀を護る)・地藏菩薩である。当山の鎮守で所村の氏神である。年々二月朔日より三日まで、獅子頭が村々を回る。

※古代の人びとは、観音・阿弥陀・薬師などの諸尊に対し、その名号(仏・菩薩の名)を唱えて、悔過(懺悔)することによって、自分に積もった罪障を二掃し、六道(死者が死後に往くとされる地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六つの世界の苦から逃れようとした)。

眷属 (一統、縁の者なり)

弥勒堂 往古は一ノ王子(権現の眷属の社)

縁起に見える。今堂は無い。身正體(白紙に仏像をあらわしたものは六所の社にある。蔵主権現が一體分身なので、ここで「南無当来導師未來仏」と唱えること。弥勒菩薩は釈迦如来入滅後この世に降り立ち衆生さまさまな生き物を救う仏である。

伝によると 中古は山上の堂中に尊像を遷摩する。今はこれ死すと云う。

・蔵主堂本尊の三休蔵主権現は中央の観音を本地とする蔵主権現にたいして、左右に過去仏としての釈迦と当来仏としての弥勒を本地とする蔵主権現を配したものである。(『山の宗教』五来重著)

・金の御獄は一天下 蔵主権現釈迦弥勒 稻荷も八幡も木島も 人の参らぬ時ぞなし『梁塵秘抄』御獄精進にやあらん 南無当来導師 とぞ拝むなる『源氏物語 夕顔』とあつて、平安中期には吉野金峯山から大峯山一帯を金の御獄としていた。(『山の宗教』五来重著)

十王堂 (八坂神社)

地藏菩薩(死者を地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六道から救済し、極楽浄土に送り届けるならびに十王死後の世界で死者の罪業を裁く十人の王、奪衣婆地獄の王である閻魔の妹で、三途の川の辺で死者の衣を剥ぎ取る婆等の像がある。孤犢 地獄、三森山も慈覺大師の開基という。それでここにも堂を建てたのであろう。

“たれもみな心にかけておもふべし 業のはかりのおもさかるさま”

※死後の守り本尊と裁判官・不動明王(初七日秦匠王・釈迦如来二七日初江王・文殊菩薩(二七日宋帝王・普賢菩薩(四七日五宮王・地藏菩薩(五七日閻魔王・弥勒菩薩(六七日變成王・薬師如来(七七日太山王・観世音菩薩(百ヶ日平等王・勢至菩薩(二回忌都市王・阿弥陀如来(三回忌五道転輪王・阿閼如来(七回忌蓮上王・大日如来(十三回忌持世王・虚空蔵菩薩(二十三回忌慈恩王)

※結界には姥堂などがあり、山の神の醜い姥神が祀られ、地獄の入口の奪衣婆と同一視され、同時に安産の守護神ともされた。生と死の女神が山と里、あの世とこの世の境界に祀られ、両義性を帯びる。(『山岳信仰』鈴木正崇著)

※慈覺大師(仁(794~864)・延暦寺第三世座主。現栃木県で生まれ延暦寺に登り出家する。承和五年遷学として唐に渡り、密教天台宗を学ぶ。帰国後延暦寺に密教修法の道場である總持院を建て、中国から引声念仏をもたらす。後の天台浄土教の深淵となる。十二年間比叡山に籠った後、東国に伝道に出たといわれ、関東には仁を開基とする天台宗寺院が少なくない。

※慈覺大師と東北、七世紀半に陸奥国、八世紀初めには出羽国がそれぞれ建国されていき、辺境鎮護の寺として天台寺院が最前線に建たされ、鎮魂・教化の先鋒役を担わされている。(『霊山と信仰の世界』伊藤謙郎)

鉢森井猿池

縁起によれば、八葉山の良(東北の隅にある山が鉢森である。昔釈迦如来が世に出た時ともに頭れた。鉢を遠く我が国に投げるとこの森に留まったことから山名が付いた。山の東麓に沼があり猿沼という。獺(狸)多く集まるからである。北麓に沼がある。長沼と云い、或は沙沼と云う。傍らに温泉があり、橋湯と名付ける。中略、長沼は今の子や沼で橋湯は今の湯崎である。一説に、長沼、橋湯はもと湯澤村にあるとも言う。

兒石・笠石

僧都智慶がこの所を通られたとき、美しい兒が手に笠を持って、水の間(間に)流れ来る花をすくっていた。思うことあつて、二禪以上五色皆無と僧都が申されると、兒は“さくら花第四静慮に咲くならば、眼色なくてなごかながめん”返し“さくら花第四静慮に咲くならば、下地の眼色かりてながめん”

十一 如意岳 兒ノ森 岩ノ口 横峯金剛 (『大峯七十五峰奥座修行記』)

・役行者は吉野山で桜の木から蔵主権現像を彫つて祀り、桜は神木として扱われたことで広まったと伝承されている。(『山岳信仰』鈴木正崇著)

唐申堂

この辺の所々にある。青面金剛仏教の病魔退散の神又は猿田彦命(神道の境界守護の神ともいう。この神は道祖神道の神とも船魂航海安全の神ともなられ恵みが広いことである。

阿弥陀堂 (粟島神社)

一の王子と称する。本尊は三體(主尊阿弥陀如来・脇侍観音菩薩・随侍勢至菩薩)とも慈覚大師の御作である。青蓮が眼を巡らしては専ら濁世人間の住む世界の苦界苦しみの多い世の中を憐れみ、金色の光を放つては念仏を唱えすべての人びとを救われる。古き歌に

“ からいやく四字大合成の風吹けば きりくも晴れて弥陀を顕はる ”

※ カ・ラ・イ・ア 四字大合成の風吹かは 霽霽晴れて弥陀を現はる。弘法大師の歌で、阿弥陀の種子であるキリクは、四つの形を組み合わせて出来ている。

旧記によれば、眞朝 先ず七間四面の大堂を造り、弥陀三尊を安置する。左に回廊を構え、右に鐘楼を建て、六所権現堂を立てて総鎮守と作し、前に三王門を構え、内に赤欄橋を架ける。橋の右に地藏堂、左に白山権現。此の外講堂、金堂、経藏、虚空藏、弥勒、勢至堂等、これ皆猿沼の壮观である。且つ瀧澤、丸岡、高坂、山副、古郡の五箇所を領田とする。

経藏

阿弥陀堂の前に池がある。無熱地にかたどり、中にある島は五柱堂に模るといふ。いつの頃からか無くなった。

五臺山

慈覚大師が衆生摂化さきまな生き物を極楽浄土へ導くのために、阿弥陀堂の後の山に土仏一千體を納められた。今も信仰者は縁仏に会うといふ。縁起には、唐の五臺山の良の角一方が欠け、紫雲に乗つて我が国に来て大峰になったといふ。

※五臺山と慈覚大師、慈覚大師は、承和五年(838)四十四歳に入唐し、十年後の同十四年(847)に帰国して、当時五台山を中心に流行していた法照流の五臺念仏五種類の異なつた曲調を用いて唱和するものを比叡山にもたらした。この念仏は来世に阿弥陀仏の浄土へ往生するために修されたもの。

※権現は本地垂迹説に基づき、インドの仏菩薩が本地で、衆生救済のために形を變えて日本の神として仮の姿で現れたとした神仏習合の理論で、一〇世紀には金峯山は唐土からの飛來説が生まれ、さらに天竺(インド)の摩訶提国の王香城を見下す靈鷲山の角が飛んで来たと言はれた。(『山岳信仰』鈴木正史著)

七 五大尊岳 五大尊五大金剛童子 (天竺七十五尊真蹟修行記)

寶頭院 (青龍寺) 往古は瀧澤道の寺澤相の奥に有つたといふ

本尊不動明王(天日如来の化身)で、自らが修行者であり、修行者を導くとして修験者が最も崇拝する仏。初七日の守護仏。元禄(1688~1703)の頃より真言宗新義の談林である。この後に獨鈷水が有る。その昔、慈覚大師が加持禱氣や災厄などを除くために、神仏の守りと助けを祈る行参したことからの名が付けられたといふ。

龍法院

本尊不動明王。知証大師の作と伝える。この寺内にも秘水が有る。

※知証大師円珍(814~911)、香川県出身で空海の甥にあたる。十二年間比叡山龍山の後、仁寿三年入唐し、良しよから天台宗を法全から密教を学んだ。帰国後円城寺を再興する。その後第五世天台座主となる。後世、円仁門流と対立し寺門派と称される。

木蓮邸宅

昔、この所に大木の木蓮子があつたことからこのように名付けられた。

※木連・釈迦十弟子の一人で、神通力超自然的な力第一の人。饑饉道を苦しんでいる七世の姿を透視し、釈迦のもとを訪ね救う手立てを問う。釈迦は安居雨季の学習期間を終えた七月十五日に仏に僧に食物を捧げれば、死んだ七世の父母の苦しみを救うことができる」と説いた。これが「**正言伝**」七世の霊を供養し鎮める(夏祭り)の由来となる。

熊野社地

昔この場所に社があつたが、中頃地蔵坂へ遷し奉る。

神明 (皇天神社)

天照大神(太陽神)が託宣お告げされた。冥於加仁正仁直奈留於以天本尊奉と。

“宮はしら下ついわねに敷きたてて 露もくもらぬ日の御影かな”これは慈鎮和尚が真言伝授の歌と言いつてている。

大神澤 同清水

むかし、この辺に大神の社あつたことからこのように名付けた。清水を右小屋の水と言う。この奥に薔薇坂といふ捷徑(近道)がある。

- ・大神社という摂社が新客の守り神とすることで、おそらく狼をまつたものだろう。(『山の宗教』五葉重著)
- ・一般に大神神社は拝殿のみで社殿がなく、山を神体とすると言われている。縁起では三輪山は三室山で三無漏をあらわし、三部(金剛・胎藏・蘇悉地)の大日如来の住するところであり、松・杉・榊を三靈木とし、そのまわりを榎・柞・椿・青木・桜の五木で輪をつくるのが社殿であるという。この輪形に常盤木を立てるのが神籬でここに籠れる神霊は大神氏(三輪氏の祖霊)として知られる大物主神の荒魂であった。(『山の宗教』五葉重著)

山神・田神 (山神社)

神書によれば、山神を大山祇命と称し、穀神を倉稻魂命と称すと。俗にこの神は一体分身で、(旧暦二月十六日より十月十五日迄は田を守り、同十六日より二月十五日迄は山を守られると。

この社と十王堂は青龍寺村内に有つたもので、今もその跡が残つている。この村ではワリン堂神明を祭る、地蔵堂本尊(行基)など、すべて当山に關するものである。寺屋敷もありその辺を門前という。

※山の神は祖霊を祀る神として、十王堂は冥界で死者を裁く十人の王をまつる堂であるが、その中心が閻魔王である。閻魔と地蔵は表裏一体で、閻魔は裁きを終えると本地の地蔵となつて死者を慰め救い、極楽浄土に送りどけるとされる。また地蔵は水分神の本地仏でもあることから、かつては山麓にまつられ常に参拝できるようにしていたのであろう。

※行基(668〜749)、大阪に生まれる。両親は百濟の帰化人で、出家時は明らかではない。律令制度で重税に苦しむ民衆は私度僧となる者も多く、行基は私度僧とともに社会事業にあつた。また大僧正に任じられ東大寺大仏建立を託された。死後も行基菩薩として宗派を超えて尊崇される。

- ・金山神の信仰は金山彦、金山姫をまつる金峯神社として山頂近く、水神の信仰は国水分神をまつる水分神社となつて中腹に、農耕の山神信仰は大山祇神をまつる吉野山口神社、すなわち勝手神社となつて山麓にまつられた。(『山の宗教』五葉重著)

・水の神は同時に山の神であつて、農耕にあつては田の神として水口にもまつられる。山麓の農民が雨乞いや豊作祈願に登り易い子守の地に、山頂の水分神を下して祀つたのではないかと思われる。(『山の宗教』五葉重著)

不動堂(桜合神社)井瀧

本尊不動明王は弘法大師が三千座修法の御時、一千座に一體ずつ彫刻されたその一仏である。旧記によれば、猿沼の南に百歩許りの平地が有り、三ヶ所に堂を造つた。一は三臂如意輪、二に正観音、三に不動の三尊である。又多宝塔が有り、泥沼院君が正祿二年(1689)二月に御参りされた。忠宗公はこの不動明王に帰依され御代参を遣わされ、また御奉納の物もある。靈験は人の知るところである。

滝の上に杉の古木が有り、それに藤がまわりつく。この様は俱利伽羅不動明王の化身である剣に龍がからみついて剣を呑む形の尊容を表すものである。・中略・水上を滝の澤という。この流れを畷川と称する。

※弘法大師空海(774~835)・香川県の佐伯氏に生まれる。十八歳の頃大学に入學するが一年で退學し、その頃沙門から虚空藏求聞持法という記憶力強化の呪法を学び仏教への傾倒を強める。その後私灌僧として畿内や四国で山林修行し出家する。延暦二十三年唐へ留学し、青龍寺の惠果より胎藏界・金剛界・伝法阿闍梨の灌頂を受け密教の後継者に選ばれる。帰国後 京都の高雄山寺に入り真言宗の創立に努め高野山を開創する。

※二臂半跏毘盧の姿をした如意輪観音像で、形式は奈良時代から始まっており、奈良仏教の伝統をひいた寺院 岡寺・石山寺・上醍醐寺において安置されたものとみてよい。しかし、平安時代に六臂如意輪観音像が講求され、制作され始めた後においては、二臂像は全く制作されなくなってしまうたのである。(『日本密教』佐和隣研著)

十六 四阿宿 俱利伽羅靈石あり (『大峯七十五摩奥院修行記』)

塔之前

その昔、この所に毘盧遮那法界體性之塔(即)摩訶大日如来に見立てた塔があつたといふ。今も参詣の人の手は石を拾つて積み置くのは、たくさん功德があるからで、有り難いことである。

※石を積むことは摩訶に見立てるもので、仏の供養となる。

三十五 大日岳 大日如来の靈石がある。峯中最も険阻な霊場で、銅鎖で岩に登る。(『大峯七十五摩奥院修行記』)

観音石

これは昔の観音堂の跡である。この石に観音の尊容が有ると言い伝えられる。また二臂如意輪は元禄の頃(1688~1703)、夢告があつた何某が石に作り安置したものである。この辺に杉ヶ澤松ヶ澤がある。これも二臂の因縁(過去)の行いが原因となって結ばれた縁だろう。

※貞観十八年(876)年建立の上醍醐寺と天平勝宝年中(749~56)建立の近江の石山寺は良弁によつて開かれた寺で、ともに如意輪観音は二臂の形式をとつている。(『日本密教』佐和隣研著)

※良弁(689~773)・奈良時代の学僧。新羅の善祥に華嚴教學を学び、東大寺の初代別当に任命され東大寺の基礎をつくる日本華嚴宗の祖。幼い時に鬻にさらわれ、現在の東大寺二月堂の杉の下で僧侶に救われ、同じ杉の所で良弁を探していた母と再会するという物語があり「良弁杉」として知られる。

・影向石または護法石のたぐいで、修験道には山岳信仰とともに洞窟信仰と巨岩信仰がある。山伏はこのような石の上に役行者や護法童子の幻影を見るのである。(『山の宗教』五來重著)

人石

一石が連なりさながら人の子のようである。この靈石があることで、当山は参詣の群集が絶えないと伝えられている。

三十三 ニツ石 鞆籠石として言ふ (『大峯七十五摩奥院修行記』)

袋石

易によれば、括囊袋の口をくくつて閉じると咎無しと。この石はさながら物を入れて結んだようである。この靈石により当山の寺院は飢寒の患いが無いと伝える。

櫻臺

弘法大師がこの櫻に袈裟を掛けられたと言ひ伝える。これは龍神が金鸕鳥を恐れるため(修行)の相生・相剋の理では金鸕鳥は木龍を剋するといふ。昔は参詣人がこの所に櫻を植えて手向け奉つた。

”我やどの手本のさくら花さけば うへおく人の身をもさかえん” 玉葉集

※日本人と桜花・日本人にとって花の中で最も大切なものは桜花であった。桜花によつてその歳(とし)の農事を卜つた。桜が散るのを惜し

む歌があるのは、花が早く散ると農事に悪いという危惧によるもので、桜花の散る時の遅延が、その歳の稲の豊凶を定めるという考えから鎮花祭を行った。柳田国男の「ただれ桜の問題」を読むと、ただれ桜は多く霊地に植えられていた。そして神降臨の木であつたらしい。(『民間暦』宮本常一)

葦坂 梨臺

きりぎりすは促織(こおろぎ)の別名で、鳴き声が、「寒くなるので早く機を織つて冬の準備をせよ」と聞こえるの蟲である。梨は年の豊凶を告げると言い伝えられるので、これもまた衣食の二つを思つたということか。以下略。

” 相思夕べ梨臺に上り立つ 葦坂禪声耳に満つる秋 ”

若菜水

この水はとても清くて、飲めば老いの心も若くなることから、このように名付けたという。

鳥海遷葬所

琴平台(舟木台)

四十六 船の多和 (『大峯七十五峰奥座修行記』)

・船の多和は平地で、船型の窪地があるのでこの名があり、「たわ」は味の意ではなく窪地を意味するものと思われる。(『山の宗教』五来重著)

弁天堂 (蔵島神社) 同坂

本尊弁財天は音楽と福德を司る女神弁大黒財宝が詰まった袋を担ぐ福德神・毘沙門(北方を守護する武神であり、財宝神)ともに安置する。神道では宗像神社海上安全の守護神である宗像三女神を祀るといふ。この谷間に天池(弁財天の池)がありこれは御手洗である。また堂の前に古い茅栗がある。往古の本尊はあまり霊瑞が嚴重で、この木の下に埋めて奉つたという。

旧記によれば、金生明神(鉱山の神)がこの山の金を掌る。常に池中に入り、水土の精を守護すると。この辺から黄金の気で土の色も変わる。しかしながら、昔から掘り出すことは叶わなかった。たとえ盗み取つても金に吹く鑄する事は出来なかったという。

五十四 弥山 本尊弁財天・弁天堂あり講堂あり小家が有り宿所である。前に小池があり、新客が手を入れて用いると濁水になる霊地である。先達より水を受ける霊水である。役行者が大峯を開く時、最初に観見されたのが弁財天であり、次に山上で初めて地蔵菩薩が出現されたが、これで吾を守護するには弱いと北山へ下られた。次に三七(二十一日)の行により蔵主権現が出現された。これこそ吾を守護する権現として第二の守護の本尊とした。註に弁財天は母親・地蔵菩薩は父親・蔵主権現は先祖である。弁財天は阿弥陀如来・地蔵尊は大日如来・蔵主権現は摩訶毘盧遮那如来であると覚えておくように。これまでは金剛界とし、これより吉野山は胎藏界である。(『大峯七十五峰奥座修行記』)

※弥山とは須弥山の略で、仏教界の世界観で宇宙の中心となる山である。水神の弁財天が祀られ山麓の天河(弁財天)社の奥宮である (『山岳信仰』鈴木正著)

七十一 金精大明神 金山毘古命を祀る。行者門がある。(『大峯七十五峰奥座修行記』)

・金御嶽の名称は金属との関係がある。奈良時代に日本の山岳信仰は神仙思想を中核とする道教の影響を受けて、山は不老長寿をもたらす金や水銀の埋蔵が信じられ、仙人の修行に折つたといふ。吉野山の高嶺は青根ヶ峰で、直下には地主神の金精大明神(金山毘古神)を祀る金峯神社が鎮座し、鉱山の神として崇められ、実際に鉱物が産出されていた。(『山岳信仰』鈴木正著)

五輪塔群

四十四 楊枝の宿 弥治兵衛塚がある。昔聖護院を案内する剛力が凍死した墓所である。行者連中は読経して

行く事。(『大峯七十五峰奥駈修行記』)

・明星の密林地帯をぬけて明るい「楊枝ヶ宿」に出る。山毛櫨林の平地に石塔が多い。「峰中七霊一切回向塔」などであるので、奥駈修行で仆れた修行者もすくなくなかったためであろう。(『山の宗教』五来重著)

一の鳥居井木戸

双方より登る坂で、土の色が美しい所である。また木戸口というのは、乱世の時に非常を禁じた所と言ひ伝える

・「两部分け」があり、天台宗を奉ずる熊野山伏と真言宗を奉ずる金峯山山伏が、ここで大峯を胎藏界と金剛界の曼荼羅に二分した遺跡である。(『山の宗教』五来重著)

二王門 (随神門)

昔は所々にあつたと縁起に見える。中でもこの所を随一とする。二王のことは秘藏記に委しい。

地藏堂 回坂 (地藏坂)

本尊地藏菩薩聖徳大師作。昔、狐師が鹿を追つてこの所に来ると、地藏菩薩の方便真実の教に導く手立てで慚愧恥じるのあまり菩提心死者が極楽往生するように祈るを起したことからと云ひ伝えられる。当山は殺生禁断の山で麓の里々でも決して鳥を食べない。まして参詣の輩は肉食汚辱を除いて精進するよつに。そうしないとたとえ登山しても権現の真理を得ることは叶わない。

※聖徳太子(574-622) - 日本に仏教が広まる基礎を築いた飛鳥時代の政治家。父は用明天皇で母は蘇我氏の出身である。崇峻天皇の死後用明天皇の妹である推古が女帝として即位したとき、摂政として蘇我氏とともに輔佐する。十七条憲法や十二冠位を制定する。また大陸より先進技術を日本に伝えなど多大な役割を果たす。

七十二 吉野水分神社 子守神社、指定村社は修験道では水分神を地藏尊の垂迹と言つ。

(『大峯七十五峰奥駈修行記』)

・役行者が大峯を開く時、最初に観見されたのが弁財天であり、次に山上で初めて地藏菩薩が出現された。

熊野社 地藏坂

祭神、伊弉諾尊神代七代目になつた神で、伊弉冉命とともに万物を生み出した神、事解男命黄泉国へ行った伊弉冉尊を追つて、「見るな」という禁忌を犯した伊弉諾尊が帰る時に化成した神、速玉男神(伊弉諾命が黄泉国から帰る際「廢離れん」と言つて唾を吐いた時に成つた神)

神祇講式では、熊野権現が西方浄土の宝刹(西方のインド)を辞して牟婁郡に降りられ、東城扶桑の金殿(日本国)の立派な宮殿に鎮座し、極楽浄土へ導くと約束された。

一 新宮新誠殿 伊弉那岐命 十二社祭。(『大峯七十五峰奥駈修行記』)

旧記は神倉神社より移る。神倉は八咫鳥築祥の地である。火祭大祭があり、音無川に鳥が出て夕方羽根を洗ひ社の森に来て眠る。

註 宝物に三柱の木像があり、伊弉那命が片腰を立てているのは如意輪観音をかたどつたものである。

房中

縁起によれば、坂部四郎、高子良宗安徳頼時の四男が青龍寺の別当になつたとき、この辺を御在所と言つたが、その頃からの名によつてである。昔の寺屋敷が所々にあり、天正の頃(1573-1582)までは四十二房あつたが、武藤家、上杉家の時は大方無くなつた。

別当 南頭院 南之坊と号する (社務所)

本尊聖観音。慈覚大師は深い考えで大日宇宙の真理を象徴する密教の根本少・地藏・観音の三身を一體にして鑄られた。宝冠は五智覚王五つの知恵を支配、宝珠は六道能化、蓮は十九説法にわたり不思議な尊容と靈験は世の知るところである。

※六道能化、仏教における来世観の中心思想は輪廻靈魂は不滅で生死を繰り返す(で、この思想を支えているのが業行である。業によって善悪の果報を受け、生死を繰り返す、六道地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)を流転し続ける。仏教徒はこの輪廻から脱することを目的とする。

※六道における観音変化身(千手観音地獄道・聖観音餓鬼道・馬頭観音畜生道・十一面観音修羅道・准胝観音真言宗・人間道・不空縹索観音天台宗・人間道・如意輪観音天道) (『林字手帖』徳山陣純著)

齋館

別当 空賢院 摩手坊と号する (空賢院跡)

本尊蔵主権現。これも慈覚大師の作である。山上は女人結界なので、この所に居られて衆生を濟度される。靈験多い。

別当 金剛院 北之坊と号する (博物館)

本尊不動明王。これも慈覚大師の作である。靈験多い。また境内に金生明神の誕生水というものがある。

大師堂

慈覚大師自作の御影がある。時々、倒木が堂へかかるが破壊することはない。そのほか奇瑞めでたいことの前兆としての不思議な事が多い。

弘法大師は正月十四日御影供。三月二十一日より毎月御影供養を行う。

興教大師十二月十二日御影供養。

理源大師

※興教大師覺鑿(1095~1143)、佐賀原に生まれる。空海の没後真言宗の拠点は京都の東寺に移り、高野山の真言寺院は衰没した。覺鑿は高野山を再興し、真言に念仏を取り入れた新義真言宗系現在の豊山派や智山派などの宗派の祖となる。阿弥陀仏信仰を密教の枠組みの中に取り入れ、真言念仏の理論をうちたてた。

※理源大師聖宝(832~909)、真言宗当山派醍醐寺の開祖。空海の弟子真雅の門に入り出家する。東大寺に居住しながら吉野金峯山で山林修行をし、貞観十六年等取山に草庵をかまえ、准胝観音無数の仏を生じた母と如意輪観音を造像し醍醐寺の基礎を造る。

※空海と真雅十大弟子の一人、聖宝と覺鑿と真言宗の開祖の教えを引き継ぐ大師をまつている。

五十五 講婆世宿 理源大師の銅像等身像がある。弥山の宿まで聖宝八十坂という(『大乗七十五講婆修行記』)

・講婆世宿とは聖宝の宿のことで、理源大師聖宝尊師の銅像にふればかならず雨が降るといふ言伝えがある。

(『山の宗教』五来重著)

※平安中期に理源大師が廃絶した入峰の道を再興したことから、当山派修験は中興の祖と仰ぐ。

関伽井

慈覚大師の関伽水仏前に供える水で、岩間より湧き出る音は煩惱の垢を除く。即ちこの流れは中堂の御手洗である。清手文によると、水で手を洗い当願の衆生は清浄な手を得て、仏法を受持するよう。

三十八 深仙の宿

役行者の腸より出るといふ香精水があり、香精童子を祈る。峯中最上の靈水である。

(『大乗七十五講婆修行記』)

・聖護院山伏はここで正規の山伏になる深仙大灌頂をつけるのである。胎藏界曼荼羅の中台八葉 すなわち大日如来の座にあたる聖地である。灌頂には行者をきよめて大日如来と同格にするために、頭の頂に灌く関伽水が必要なのだが、北側の一枚岩の大巖壁からしたたる香精水がある。(『山の宗教』五来重著)

回向堂

この所で縁無縁の卒塔婆供養のために立てる塔形の細長い板を立てる。この辺りに往古浴室があつて、賢護菩薩の像もあつたようである。

毘沙門堂 勝手明神水と深く関わる神の本地堂

本尊毘沙門並に地藏、観音の三菩薩がある。

・子守勝手は地藏毘沙門天の垂迹である。あるいは子守は地藏菩薩 勝手は勢至菩薩である。

(『玉置山権現縁起』)

・水神の信仰は国水分神をまつる水分神社となつて中腹に、農耕の山神信仰は大山祇神をまつる吉野山口神社すなわち勝手神社となつて山麓にまつられた。(『山の宗教』五来重著)

大巖堂 附大巖房

正保年中(1074)76無くなつたといふ。大方は中堂などに本尊を崇め置く。

天満天神

山もとの天神と称する。これも無くなつた。麓に由緒ある梅の古木がある。

※天満天神は平安初期に活躍した学者の菅原道真を神として祀つたもの。若くして文章博士となつたことから速まざる出世を妬んだ学者仲間の画策や、ライバルの藤原時平の讒言により太宰府に左遷されしむ。道真の死後京都では天変地異が続き、紫宸殿に落雷があり時平は高逝したことから道真の祟りとの風評が広まつた。以後天満自在天神(雷神)として崇められる。

・蔵王堂のすぐ前の威徳天満宮は、道賢上人日蔵が金峯山浄土で地獄に墮ちた菅原道真の霊とあつてきたといふ来由でまつられたもので、もと金峯山にまつられていた。(『山の宗教』五来重著)

春日社 附藤本房

いつの頃か無くなつた。

御神歌 我を知れ釈迦牟尼ほとけ世に出でて きやけき月の世を照らすとは

不空羅縲索

いつの頃か無くなつた。

日記によれば、国司が造営したもので、文殊知恵の方で悟りに導く。普賢とともに釈迦の脇侍となる。普賢(理性と行動力)を持ち、文殊と共に釈迦の脇侍となる。馬頭怒りの表情で諸悪を砕く。准胝(無数の仏を生んだ母、十一面あらゆる方向を向き、衆生の苦難を見逃さない。不空羅縲索繩の方で人びとを濡れなく救う)菩薩で、皆美しい杵形を象つている。

明星水

慈覺大師の閻伽水である。寛永の頃(1624)44までは時々日中に泉が見えたといふ。また玉の泉ともいふ。

五十 明星ヶ岳 (『玉峯七十五峰奥庵修行記』)

文殊楼 井経塚

今の文殊院建立の頃土地を整地すると、三尺ほど下から唐銅の仏器が出た。この寺を玉泉坊といふのは、あの明星水を象つたからである。文殊院の後ろに経塚といふ、大きいセンの木香木である榎の木がある。この下は皆石経である。

・湧出君の北方には、藤原道長が寛弘四年(1007)の登拜時に写経を経筒に入れて埋納した経塚がある。願文には極楽浄土を願うとともに、弥勒下生に立ち会い、経巻が湧出し、会衆を喜ばすことを願つて記されている。金峯山は蔵王権現の本地の弥勒の浄土とされ兜率天の内院の四十九院に擬せられたことから、吉野金峯山と熊野三山が人びとの信仰を集め経塚が築かれた。(『山岳信仰』鈴木正著)

山王権現

今は吉祥院の道場に崇め奉る。この尊容を整えて都より下つた時、猿が守護し奉つたと慶昌が語られた。有り難

い事である。

普賢堂

今堂は無く、この所に名木の梅がある。

“ふけんのまへによめる法華經 うぐいすのこゑは櫻のこずへまで”

衆徒修験者によると、普賢院の本尊は弘法大師御作の不動明王立像である。住持が他に出かけた折、客が来ると不動明王が回宿の山伏となって現われ、素麵など振舞われる事が度々あった。あるとき住持が途中でその客に会い、思いもよらず御礼を受けた。その後不動明王を座像に作り直すと、そうした不思議は無くなったが、靈験は更にあらたかである。

鷺池

旧記によれば、池の辺に大木が多く有り、鷺がたくさん棲むことからこのように言う。この鷺も普通と違い羽が黒く硯の墨のようで、羽の根本三寸ばかりに玉を巻いたような珍しい羽なので捕まえて帝王に奉ると、このような珍しい物が我が国にもあるのかと、この羽が出ることから出羽国と名付けた。

千手院

本尊千手観音千の手と千の目を持ち、どんな願いも見落とさずすべての人を救う枯れた木に花が咲くほどなので、若木が栄えることを祈り頼むように。

寶積院

本尊不動明王。藤本坊屋敷もこの辺である。

不動瀧

これを瀧瀧口という。本尊は弘法大師が石に刻まれたもの。神仏が願れることも少なくない。東坡居士宋の蘇軾(1036〜1101)の号。字は子瞻。北宋第一の詩人であり、政治家としても活躍の詠に

“溪声即ち是廣長舌 山色豈清浄身に非らざらんや 夜来八萬四千の偈仏の功德や教をほめたまたもの 他日云何学未人”

中堂 (中の宮)

本尊の如意輪観音は、もとはこれ一體で六道能化に靈験があることは、世の知るところである。札所巡礼の歌に

“めぐり来て金の峰にのぼる身は 連のつてな音塵の心地こそすれ”

これゆえに、地藏坂の辺りよりここまでの地形を芙蓉深蓮の花に似た谷・美しい谷とも言う。

旧記によれば、鷺池の跡に五間四面の大堂を造り、如意輪観音を安置する。これは慈覺大師の作である。大門に四天王を安置する。この外に大聖堂、毘沙門堂、多宝塔、五間四面の回廊がある。又、この南に一條瀑泉がある。この辺に三堂。一つは千手観音を安置し、一は不動明王の三尊を安置する。

入峰修行の時、この堂前に小柴という物をさし、またこの堂と行者堂との間で修する事がある。そのとき、軍荼利明王と妙見菩薩をはじめ、このところに崇め置く尊像多い。

※仏教における来世観の中心思想は輪廻意識は不滅で生死を繰り返すので、この思想を支えているのが業行である。業によって善悪の果報を受け、生死を繰り返す。六道地獄・餓鬼・畜生・修羅、人間・天上を流転し続ける。仏教徒はこの輪廻から脱する事を目的とするが、如意輪観音は六道解脱のための教化に力を発揮する仏とされる。

※六臂如意輪観音像は繁栄を祈る本尊として、天皇一代の守護本尊としても安置され、宮中において護持僧(延暦寺系)が念持していた一尊であるが、真言系においては僧侶の修行の階位において礼拝念持する本尊としても用いられた。(『日本密教』佐和隆研著)

※如意輪観音の別名は如意輪蓮華峰王で、真言の意訳は、与願者蓮華尊に師命し奉る、能滿願。

※軍荼利明王、身体に蛇頸悩をあらわすを巻きつけ、これを退治するとともに、天災や病氣などの障害を取り除く。また金剛薩埵菩薩

薩の化身とされる。南方の守護神 南十字星

※妙見菩薩・水天と同様亀に乗る武將の姿で、国土を守り災禍を消滅し福寿を増すとされる。北斗七星は人間の命をコントロールする神秘な力があるとされた。北方の守護神 北斗七星

*中堂が南向きなのは北を拜するためと思われる。

※中国哲学では、宗廟祭祀は北方陰祀である。何故といえ、北の子の方は陰陽終始のところで、陰陽統一の象をもつ。死者の魂魄というものは神・鬼となって分離するが、それを収束するところが宗廟である。死者の魂魄を統一するところの宗廟をよく祀る以上孝の徳を顯すものはない。もし天子が宗廟祭祀をおろそかにすれば水害は忽ちに至り、水は溢れ奔流して城邑を壊滅させるのである、という。中国陰陽五行思想において宗廟上墓が水によって象徴される北方、子の方に宛てられ、死者に北枕させること墓に水をかけることなど中国思想がそのまま日本において踏襲されている。(『陰陽五行と日本の民俗』吉野裕子著)

○修行門・修行に精進するために歡樂の閨門から脱出する

地藏堂

本尊地藏菩薩が中堂に在るのは、地藏の功德が少なくないことを証するもので優れている。この菩薩は本来六道能化で、殊に来世が時期相応であれば靈驗が多い。

旋頭歌に、六地藏尊六道で苦しむ衆生を救済するの心を

”月は入り 日はまだいでぬ中空の やみを照らすは暁ことの誓ひなりけり。”

麓に酒町地藏と称する地藏尊がある。これは溝の中より掘り出され奉るものである。これらを取り合わせて六地藏参りをする信者がいる。

※六地藏・大定智非地藏(地獄)・大徳清淨地藏(餓鬼)・大光明地藏(畜生)・清淨無垢地藏(修羅)・大清淨地藏(人道)・大堅固地藏(天道)

鐘楼

鳴鐘の偈仏の教えや功德をほめ讃えたものによれば、願わくば諸々の賢聖が同じ道場に入り 願わくば諸々の悪道から俛時離れるように。

日月石

明星水尊にあわせて三光にかたどる。日照王月、月光王月の二菩薩が影向神仏が一時姿を現すする靈石である

相生松杉

両木が相並び、一性男女が好意を寄せているようである。男女不縁の者はこの木に折れば験があるという。

不動堂 (龍潭神社)

これは乃影向の瀧より移したものである。この所の水は瀧の流れである。本尊不動明王、脇士(鈴鷄羅童子・制毗迦童子)共に慈覺大師の御作で靈驗が多い。

行者坂

この所を登ると通常の参詣道である。また吹越の谷合からも道が有る。

吹越 往古女人禁制

入峰の時、入口に胎藏界金剛界、天地、陰陽を表示する小柴というものをさす事がある。南方と東方を正面とする。本社は東向、中堂は南向で、これまた天日如来の治める理智法爾物質世界の理である胎藏界と、智という働きの世界である金剛界の道理と知恵の妙、源意がある。

四 吹越山 除魔童子を祭る (天養七十五 藤原隆修行記)

金剛道場 (吹越道場跡)

入峰修行の籠り宿で、十界地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞(教えを聞く人)・縁覚(ひとりて悟りを開いた人)・菩薩(悟りを求めるもの)・仏(悟りを開いたもの)開悟(悟りを開く)の道場である。秘訣なので記し難い。当山古記の中に

”吹越をしきりにとよばおともなし 松のはすへに法の松風”

善知鳥坂

うとふは殺生を戒める謡である。歌に

”みちのくのそとのはまなる呼子鳥 なくなる声は謡ふやすかた”

※善知鳥にまつわる話・都の貴人小納言鳥頭安方は、罪を得て北の果て青森県の外ヶ浜へ流罪となり、子は遠く南の果てに送られたのであった。安方は沼の辺に草屋を作り、赦免の報せを待ちつつ村人に様々なことを教え暮らしたが、年老いこの地を住しく他界した。村人は悲しみ、憐れに思ひ骸を手厚く葬った。それから間もなく、この墓の辺に今まで見かけたことのない鳥が飛んでくるようになり、悲しい声で啼いたという。その鳴き声は親鳥が、うとうとよばば子鳥が、やすかた、と啼えるように村人には聞こえた。村人たちは安方父子の一念が、不思議な鳥となって呼び合うのだと噂し、安方の墓に祠を建てて祀ったという。怨念の思いを込めて啼く鳥「善知鳥」は北方の島で繁殖するウミスズメ科の鳥だが、漁師たちは親鳥の留守を狙って鳴き声をまねして捕えた。親鳥は雛が捕まえられたことを知ると狂気のように飛び回り、血の涙を流して悲しむという。血を浴びた漁師は怨念が移ってそこから腐り、死後は地獄に墮ち、その姿は怪鳥に変わるという。（『日本の伝説3 ロマンの旅』）

※金剛蔵主権現という金蔵の王を祀る社へ向かう坂であることを強調するために付けられたものである。『十二支』で吉野翁子は次のように記している。謡曲「善知鳥」は仏教話ではあるが、現世では優しい鳥であったものが、地獄におけるその鳥の恐ろしさは、鉄の嘴、銅の爪、荒く羽はたく双の羽に迫り立てられ、逃げ場もなく日夜苦しむという。陰陽五行の理に当てはめると、正に金気の持つ剛性そのものである。また金気 성격は変化することでもあり、この世では穏やかな優しい鳥が、あの世では「金雀」の本性を露き出しにしている。

弁慶清水 峰中秘記には前鬼清水と号する (前鬼清水)

義経一行が山越しに女人道より下られた時、姫が渴かされたので弁慶に水を探させると、この谷合に霊水があるのではないかと大石を引き除くと、たちまちほとぼしり湧き出た。その石は砕いて杉ヶ澤の内にある。それより弁慶を御名代に参詣させた。これも懐妊中の姫君を御同道しているため汚辱を憚られたからで、これより大玉寺(鶴)へ帰られ日吉社の前に義経橋があり、その辺りに櫻の井戸もある。

・『義経記』は金峯で義経と静は別離し、このあとで静御前は徒者にも乗せられ一人になり、やがて「吉野の御獄」蔵主権現の宝前で、法楽の白拍子を奉納する。（『山の宗教』五葉書）

影回瀧 峰中秘記には無相瀧と号する (無相瀧)

吹越の辺なので、入峰修行に諸天神が影回姿を顕すする地である。

棚松 この所を光明台と号する 八景台？

この松は凡そ千年もの間緑が絶えることなく、入峰修行の節は金剛童子の棚を飾り供物を備える。また、中台(八)葉の中心で大日如来の座とこの所に小柴をさす秘密もあり、篤信の人は峰に入つて深秘を伺うように。昔は順逆両峰修行を行つたが、天正15(73)〜9(79)の後逆峰は無くなった。今修行をするのは順峰である。

差定明年差峰之事

順 阿闍梨祐俊
逆 阿闍梨秀玉

右此旨を守り、懈怠無く修行致す可く候者也。衆議に依て定むる所件の如し

文安五年(1448)正月廿八日 時所司僧都智慶謹書

二月二十日 今日麓より登つて響応がある。口あけという。

同 二十五日 先途講という。さまさまな法式がある。

同 二十八日 今日より門出して左の所を經行する。

順峰

青龍寺村

これより発心、修行等の表事が多い。秘訣なので記さない。

高坂村 館山

安楽寺の山号を玉谷という。これは高館の一つである。昔はこの所にあつたとして今も礎などがある。高坂中務の事は人の知る所である。また古館という所もある

十 玉置山 玉置神社は三光禪師大社日本三天の一である。

註 役行者が雨降りに困っていると童子が現われ、この木の下に宿れば雨はしほげ、水は岩間に出て、焼木はこの所に集まるので安心して休むようにと申された。行者が誰だと尋ねると、玉置禪師でこの上の岩の玉の前に来て玉置明神と呼ぶようにと申したのは文殊童子である。(天峯七十五峰奥座修行記)

赤坂村

この所に入峰の秘訣がある。当所と高坂の薬師堂は共にあの伊藤氏が再興したものである。

旧記によれば、時に村では五間四面の大堂を長沼の跡に造り、東来寺と号し薬師と十二神将とを安置する。その外仁王門・多宝塔・白山・大黒・毘沙門堂・鐘樓・回廊一々立派であつた。小牧と風気崎の二カ所に家任が五間四面の大堂を赤淵沼の跡に造立し、満願寺と号する。本尊は釈迦仏である。長沼と同じく立派である。

三 熊野湯峯 東光寺 鳥羽天皇勅願所 本尊天然湯化生薬師如来 (天峯七十五峰奥座修行記)

藤澤村 回館山

この所は遊行上人印堂1632より伊吹山で修験を行き遊行聖となつて各地を回るの墓が有ることからこのように名付けられた。当所の館主は高坂中務と共に武藤家の長臣たと言ひ伝えられている。

※清水の藤墓には自殺者とか戦死者など、普通でない死にかたをしたものの墓が集まるという。清水のモリは、頼朝一二四九〜九九の奥羽討伐軍を防いで死んだ田川太郎を葬つたところともいわれているが、天正年間(一五七三〜九二)の「庄内崩れ」といれた戦争で死んだものの葬所とする伝承もある。藤墓のあたりからは土葬された人骨がたくさん出たという。

(『新版出羽三山修験道の研究』戸川安章著)

上田川大日堂

入峰の時、この所ではじめて貝を吹く。この所の旧跡は妙幢院の縁起に見える。法華経に、今仏の世尊釈迦が大法教を説こうと願ひ、大法の雨を降らせようと大法螺を吹く。

笠掛岩

下田川の入口にある。この所の八幡宮は家義朝臣の陣の跡で、勝喜山と号する。武衡・家衡の像は不二軒にある。

錫杖水

廣濱入口の川をいう。

“ 廣濱に今日来て見れば深如海 弘誓の舟はここへ寄らなん ”

大谷薬師

一の宿拜所や宿泊地と称する。昔は山内にあつたのを、この所に移すという。

虚空蔵藏

二の宿と称する。この所に二夜籠つて秘訣が多い。常は十二日を縁日として諸方より参詣する。籠を求めて帰る

蓮華寺村

昔は寺があつてこのように名付けた。二の宿より直ちに峰を通る道がある。

塚下村

鬼坂は役行者よりこの名が有ると云い、また地藏菩薩が起戸鬼を退治された名であると云う。この所の火打石を荒沢の鑽火に用いられたことによる。

- ・深仙から東に下り前鬼の集落に到達する。前鬼は平安時代以来の山中の根拠地。(『山岳信仰』鈴木正実著)

大机村井砂谷村

三の宿と号する。ここにも二夜籠つて秘訣が多い。

- ・役行者は大峯山中で七度生まれ変わつて修行し、精魂こめて山中に閻伽井と大壇を設けて三重の岩屋で祈願し初重に阿弥陀曼荼羅、中の重に胎藏界曼荼羅、上の重に金剛界曼荼羅を築いたといふ。(『山岳信仰』鈴木正実著)

長瀧村

その昔、新田、脇屋の氏族がこの所に隠れ住んだといふ。実に里の有様は今昔物語に出てくる飛騨国の隠れ里などを思い合せても、なせ通があるのか不思議である。案ずるに寿永1(1182)と8(1188)の後、建武の末(1336)に平家や新田氏族が当国に徘徊されたと言われ、所々に語り伝えられることが多い。

鑑神井金剛窟

祝言によれば、鑑は勝手明神水の神が鎮座する所である。

旧記によれば、金剛窟は宝庫である。往昔は祭礼具がこの窟の中から出る。昔、寺田村に徳のある者が居て、その家に折々この神が往来されたと言ひ伝える。

- ・勝手大明神は左手を腰に押し、右手で太刀を抜き、甲冑を着する。(『玉置山権現縁起』)
- ・洞窟信仰にはそこから黄泉にかよふ通路とする考え方があり、よく積石がみられる。大峯修験道の洞窟信仰は胎藏界の窟と金剛界の窟で代表される参籠と、死者供養との二面性をもっていた。(『山の宗教』五来重著)

逆峰

弘法大師が湯殿山に入り大日如来を拝する。如来が告げるには、西方に釈迦如来の靈山がある。更に西方は釈迦如来誕生の道場である。仁者が往来すれば必ず利益があると。この時大師は東北より登山して仏と世尊を拝すると、一手は天を指し一手は地を指し、四方を回顧して言われた。「天上天下唯我独尊」といわれた。大師は敬礼して多く付属する所があつた。湯澤嶽を尋ねて摩耶山へ到る。これが逆峰の要路である。(本社案内より)

峰薬師

この堂、昔は母狩の辺にあつたのを、金野何某が信仰のあまりここに移したといふ。靈験は世の知るところで、往昔はここを一の宿として秋峰を修行した。

瀧澤村井山谷舎

この所に昔居寺があつて、今も門前といふ所がある。近年まで傘松といふ名木があつて、理圓、寶傳などといふ詩僧などが吟詠された。また山谷にも寺屋敷の跡がある。山谷は神の名と云い、龍神の事によつてである。

※龍神・三玉龍神とも云い、神道・修験道・密教などの諸要素がミックスしてできた神といえる。荒神の一種で、清浄を尊び不浄を嫌う性質があるとされる。そこからすべてを浄化する火の信仰と結びつき龍の守り神として祀られる。三玉は仏・法・僧の三玉を守護する。眷属はすべて龍鬼邪悪人に出入りをなす存在であるが、丁重に鎮め祀ることによつて三毒が転じて三玉になるとされる。役行者が葛城山で修行中、三玉龍神に拝謁したといふ説もある。

蔵主権現

谷定と西荒屋とにある。昔は六所権現の獅子頭を谷定の社に一夜留めると、その獅子頭と終夜噛み合ったとい

う。昔はこの辺にも能などがあつたと云い、古い面や笛などがある。

葉分山

縁起によれば、一番山を阿弥陀峰という。昔、山の下に一人の漁師がいて、狐兎麋鹿を殺して生活していた。こうした生き方を反省することなく罪業を積んでいた。一日弓箭を帯び、谷を渉り峰を登った。いきなり樹間に光明赫赫として山林を照らすものがあつたので見ると、その中に正身の阿弥陀如来が見えた。この様子に漁師は愕然として拝み奉つた。

この山の俗称は母来を伯者と唱えるのに似ている。その昔、鳥海弥三郎の庶母父の御室で子を産んだ者が、この山に籠つたのを養つたことから、母狩山とも言つて言い伝える。或は、弥三郎は庶母、或は坂部四郎の母か。

遠賀社 附 蝦夷館 鼓瀧

八大龍王水の神を崇める。一栗丘部少輔が石築地を物にする時、この社に祈つて成就したという。上古にはこの辺も湖であつたとて、蝦夷ヶ館の岩に波の跡がある。その後、西行法師修行の折に詠んだ歌に

“ 音に聞く鼓ヶ瀧を来て見れば 只山川のなる瀬なりけり ”

山の神が現われたので唱えられたと言ひ伝えられる。

※八大龍王、補陀落山に居られる観音菩薩を守護する。難陀竜王本地薬師

・跋陀竜王本地普賢・娑羅竜王本地文殊・和修音王本地弥勒・徳叉迦竜王本地阿弥陀・阿那婆達多竜王本地地藏・摩那斯竜王本地観音・優鉢羅竜王本地虚空藏

※西行法師(1118~90)、真言宗の僧侶。俗名を佐藤藤清といひ、鳥羽院の北面武士であつた。一一四〇年に出家し西行と号した。奥州行脚の後高野山に入り活動し、その間も高野を訪れ大峰入りの修行を積んだ。

湯澤嶽 日川

熊出と本郷との間である。世出の洗兒湯にかたどる。昔は雪場で参詣もあつたので、装束場、別当ヶ台などという所が今もある。中頃、荒い熊が住んで往来もなかつたが西行法師が登山して、熊の住む昔の岩山おそろしむべなりけりな人もかよはず、このように詠まれると、その熊どもは出なくなった。それで熊出と名付けたと言ひ伝えられる。

御陵山

一説には金崎の宮をここに葬り奉るといふ。追つて考えるように、この辺を塚澤といふ。このほか妙見堂、四寸道などいずれも由緒ある所である。

尾浦橋

昔は大高寺という寺があつた。天正年中(1573~9)六十坊と石碑に有る。順礼の歌で

“ 大うらや石の島井の玉の水 いざいぎ汲みて親に手向けん ”

諺に閻魔の序で四寸道、尾浦の橋を見たかと問われるがよい。入峰の秘説がある

荷葉山 附 大寺村

伽耶山とも。この村は大方安倍氏である。これらも縁起の説に由緒が有る。

三寶窟 井 美女越

松澤の奥にある。これまた由緒有る事である。この道の筋道は龍峰の案内記に委しい。また美女越といふのは松澤と倉澤との間にある。昔源美女丸が修行の時、この道を通られたとて、大鳥にも美女行といふ所がある。

麻耶山

倉澤の奥にある。仏母の御名にかたどつて由緒がある事である。山の内に雪場が多い。またこの辺に梵字樹といふ所がある。

本覚院

仙納村にある。南頭院の末寺である。この寺の住僧が蛇に侵されたが、権現の御加護で免れた事がある。昔は仙翁村と言ったという。

大鳥山

大鳥村にあり、女人結界の地である。本尊は丁藤祐経の護身仏という。すべて大鳥の名は行基菩薩に由緒がある事だという。

曹明神

鑑明神に対する名である。祝言によれば、曹は金剛夜叉明王不空成就如來の化身で、迷い苦しむ人びとを救済するである。この辺より大鳥の池の傍らから米澤、長井まで古道がある。

金峰山案内記 金峰萬年草 (下)

序

吾山久しく稱する。地脈は日光山に連なる。近くは城南の第一の峰で、寿を君侯に獻する地である。これより世々六邑の米地を賜わり、加えて二郡の初穂を以てする。それ故、権現の祭祀、僧侶の衣食、少しの間も断つこととはない。以下略。

行者堂 (須佐之男神社)

役優婆塞と理源大師は、当山派真言宗醍醐寺・本山派天台宗聖護院入峰の両祖であることから御影を安置し奉るすべてこれらの人びとに祈ると靈驗がある。この辺を行者戻しという。参詣の人は罪障を懺悔して登山するように。易によれば、悔咎過ち・災いとはその小疵小さい傷を言うのである。咎が先ければ、よく過ちを補つものである。
五十八 行者速り 岩屋に金剛童子を祀る。頂上を剣ヶ岳という。清水の滴る所がある。

(『大峯七十五峰奥座修行記』)

駒王子堂 (八幡神社)

本尊馬頭観音。天上では房星二十八宿の一つで、さそり座の西北隅に表れる。馬の病を祈願すれば必ず感応がある。

旧行者

昔役行者がこの所で修法されたという。何某の話では、貞享の頃(1684~87)二、三人が連れ添って参詣の帰り、家頼の中にここから滑って駒之王子の右方の柱へ両足を挟まり暫く動けずにいる者がいた。皆が驚き懺悔させると汚辱のことがあった。またその後参詣の折、青龍寺村の橋まで来ると、家頼が急に眼がくらみ山上へのお供ができなくなり嘆くと、これも懺悔させ川で閻伽折離をすると回復し、参詣することができた。誠に神仏の働なることを語られた。

二十九 前鬼山 役行者小角神變大菩薩の根本道場として永く宿坊に求められる。(『大峯七十五峰奥座修行記』)

八景台

三本杉

聖徳太子の憲法によれば、「真心を込めて三宝を敬え。三宝とは仏供りを開いた釈迦・法釈迦の説いた教へ・僧(釈迦の説いた教へを受けて修行する僧の集団)である。すなわち四生の終わりの帰るところあらゆる生き物の最終のよりどころ、万国の極めの定むこの国においても究極の規範である。いずれの世いずれの人か、この法を貫はざるこれを尊重しないということはない。人はなほた悪しきもの鮮し(懺悔人)といのはめつたにない。よく教えるときは従つて(ついで)教えたならばその通りに従つ。それ三宝に帰りまつらば三宝をよりどころとするほか、何をもちか枉れるを直

さん何によって、間違いを正すことができようか。

杉は正直な形で、元より神木である。殊にこの木は三室にかたどり大参貫い。中古までこより選擇して、山上へは人峰修行のほか到達し難い。この辺に仏法僧が鳴くともいう。

”鳥の音もみつの御法を聞かすなりみやまの奥の明けがたの空”

十二 古屋宿 三本杉 水呑金剛童子 (『大峯七十五 靡輿修行程』)

牛頭

文によれば、端嶽が角牛(闘牛)を好み二千両を得たという。或は牛は毘盧遮那天に縁のある畜なので、その名があるとも言い、或は巫石に対して牛女の二星織女と牽牛にかたどるとも伝えられる。十一面觀音が影現する場所である。

※毘盧遮那仏と牛の関係・京都の祇園町にある八坂神社は、明治以前には祇園牛頭天王社で、祭神の祇園天神は牛頭天王・武彦天神ともい、インドの北方に現れた神とされる。祇園とはゴ・サラ国に釈迦が建てた道場の祇園精舎に由来するもので、この祇園の守護神が牛頭天王であった。

右参詣道

左女人道

これは南北の村里が往来する道である。これより上は参詣道で「油こぼし」へ出る結界の場所なので、たとえ男でも汚辱の人は通つてはならない。参詣の老若、内外清浄であるよう心得るようだ。正徳の頃(1711~15)、酒田の尼が結界を犯して登ると、忽ち震動雷電して谷底へ吹き落され世間で取沙汰された。

女人禁制の鳥居

六十九 藏宿 百丁茶屋の所

足摺行者尊と行者母尊がある。御番開所百嶽山風閣寺の地・藏峠・龍泉寺・幡幡岩屋・女人禁制所である。

(『大峯七十五 靡輿修行程』)

・金峯山は黄金を地に敷いて弥勒下生を待つており、金剛蔵主は黄金を守り、戒律に従う地として女人結界を維持するとされた『本朝神仙伝』。罪穢を嫌う清浄の地で、皇族や貴族は百ヶ日を「御嶽精進」と称して厳格な精進齋の後に金峯山へ登拝した『源氏物語』夕顔巻。女人結界には戒律順守の意味合いが濃い。

(『山岳信仰』鈴木正盛著)

閼伽井

中古、この水を加持するとどのような早にも水が枯れることはない。昔はここに矢大臣門があったと言つ。

旧閼伽井 或は御砂池

龍神の道筋で寒風ヶ臺という所の湖水である。いつも水が滔々として龍神が棲むという。請雨の法を行つと忽ち甘雨を下すことは世の知るところである。

夏清水

本社より南の藤澤側にある。この水は夏のはじめ頃に湧き出し、夏の終わりに止まる。百日紅という花も同じ趣である。

這石

三尺四方ほどの石である。元は道の下にあったが、ある時、道の上に這い上がった。誰もが慎んで神慮を怖れる。昔、弘法大師が腰を掛けた石なので、道の下に有つては不浄として上げた。石ですらうなので、人は殊に神仏を敬つようと御託言があつた。それゆえ癩(癩)癩(癩)など患う者はこの石に折れば忽ち平癒する。

岩堂

往古 本社^{いじりう}の道壇等にこの所の石を用いた。礼所百番の内^{いじりう}で観音の岩屋ともいう

” ぶたらくの峰の岩堂来てみれば たらす甘露のたきるなりけり ”

袋窟

これは藤澤村楯という所より程近い。神代の巻によれば、風は土囊の口より生ずる。風神は今大和の国にあつて、龍田の神がこれである。当山で止風の法の行を行うのは、このような因縁である。

荒澤地蔵堂并燧石

藤澤村の内^{いじりう}で、今もその所を荒澤という。堂がある。無くなり本尊は修験道場にある。また火うちわけという山がある。荒澤鑽火の因縁によりこのように名付けるという。

四寸道

この上にてかけ石がある。下に足跡が見える石がある。これには因縁がある。この辺の澤水へ年々魚が登ることがある。さながら七五三を掛けるようである。これを取つてはならない。七五三掛け魚という。

五粒松 (五葉台?)

海辺の道者は、金峰山五葉松と祝つて、下向には持ち帰る。藤澤村の者はこの辺より枝葉を取つても咎めがある昔から童謡に

金峰金峰の さんざ 五葉の松風も色がない

金峰山から吹き出る風は 身にもしゆますに なつかしや

さてもみこの出羽様お國 こがね花咲く金峰山 ”

右は往來の路傍を記す。

油覆

この坂をこのように名付けたのは、参詣の者たちが信心を凝らして油鉢を堅固なものにするという思いからである。常に油断といふことも涅槃悟りの心である。

・藏宿から洞辻六十八まで百丁は難所で、道は大天井獄の東肩を巻いて、ひたのぼりに登りであり、七ころどころに急坂(最大の難所蛇腹峠)がある。(『山の宗教』五葉重著)

痕松

医書に六痕の名がある。源氏物語にわらばやみとあるのもこのことだろうか。それには御符を作つてすかして付けるとよい。これを松に縄を結んで、治なれば解くようにと云われている。必ず効く。岩代の松より貴い。

巫石 (みこ石)

昔結界を犯して石になつたという。播磨にあるという神のミコ石もこの類だろうか。

・金峯神社の先三町ばかりに「女人結界石」があつて、それから先が女人禁制であつたが、むかしから金の御嶽は女人ものほりえた。(『山の宗教』五葉重著)

冬見瀧

雪の降る頃、遠くからよく見えることからこのように名付けた。吉野には夏見の川がある。当山にこの名があるのも大悉恐れ多い。いつの頃か、与治郎という放逸者が霊場を汚したためにここから落ちて死んだので、今は与治郎瀧とのみ言つている。

・吉野宮の位地については金の御嶽と無関係な吉野宮は考えられない。したがつて金峯神社の青根ヶ峯のピーク直下にある宮瀧が、万葉に多くうたわれる「吉野なる夏実(菜摘)の川の川淀」を前にする地勢とあわせて、吉野宮址とするにもつともふさわしい。(『山の宗教』五葉重著)

貝吹岩

昔逆峰の時、ここで巳午前十時丑午前時の二刻に法螺を吹くのは、長床の後ろ二町約二八の程隔たった所である。この辺に鍛冶屋敷がある。

静窟 附 胎蔵岩

少彦名命が鎮まれる所からこの名がある。中頃、天如海が籠ったという。今も祈願の僧が籠ることがある胎蔵岩は俗に胎内くくりという。行ぬけの窟である。

三十九 都津門 胎内くくりの行場がある (『天峯七十五峰興隆修行記』)

・谷に突き出た巖壁に人間がくぐれるぐらいの穴があいている。「都津門」とも「極楽の東門」ともよばれる行場で、これをくぐれば極楽へ行けるという信仰がある。山岳信仰は生きているうちに、自分の死後の苦しみを果たしておくものだから、後生安楽が約束されるのである。(『山の宗教』五来重著)

天狗会場

俗に天狗の相撲取り場と言う。すべて名山に天狗が居て仏法を擁護するのは、世の知るところなので略す。

玉谷 (玉屋台?)

これは高窟である。安倍家の秘書を納める石櫃がある。玉谷ということは、瑠璃をかたどる名である。案ずるに金玉は世に重宝するのみならず、神仏にも寶とみなされている。水晶が出るとも伝えられている。

柴燈壇

爾雅中国古の辞書によれば、柴を燻いて天を祭るなりと。この所で毎年除夜に柴燈がある。天下泰平国家安穩の御祈祷である。

籠守堂 (保食神社)

常には長床という。本尊の地藏菩薩は弘法大師の御作である。籠守明神の本地仏で、異常があるときは汗を流されることもある。また、参籠不浄の者は夜中驚かされ、信心の者は晨朝朝の動行遊戯の錫杖の音を聞く。

勅銘石

この石は、もと瀧澤村の不動院に在ったのを、因縁あつてここに引き上げたものである。銘は左のようである。

・銘不明・

三宇荒神 (三宇荒神)

龍神の興津彦神・興津姫神、または土祖神を合せて祭る。また素戔尊を祭る。仏法を擁護し、世間利益の事など委しくは荒神に託される。

或いは、地神と荒神とは同体である。釈尊が悟りを開いた時、この神が始めて出現されたという。

籠守大明神 (三宇荒神の内)

祭神倉稲魂命。殊更密法擁護の御神なので、ここに崇め奉る。

松尾大明神 (三宇荒神の内)

この神は酒造りを守られ、殊に子どもを痘瘡から守られるので、参詣の老若はよく拝し奉るよつに。

一望台

誕生窟 (奥の院)

この所から権現が出現されたという。遼く龍宮に通ずるという。その昔、試しにこの窟へ銚子を落とし入れると、遼か酒田港に出たので、その所を銚子口と名付けたと言ひ伝えられる。しかしながら、寛永の頃(1624~43)、地震で岩を揺り落とした。どのような神慮によるものか知り難い。

六十七 山上ヶ岳 亀石 等覺門 (『天峯七十五峰興隆修行記』)

・大峯山は亀の上に乗っているとされ、その背中にあたり、頭は吉野、尾は熊野に伸びているという。秘歌「お亀石踏むな叩くな杖つくな よけて通れよ旅の新客」と唱える。(『山岳信仰』鈴木正幸著)

○等覚門(善徳門)・極楽往生を求めて西門から入る

本社 (金峯神社本殿)

・一書によれば、金峯神社は藏主権現垂迹少彦名命 本地釈迦如来である。祭神の少彦名命は高皇產靈尊の子で
大己貴命と共に蒼生人民を經營される神である。

・嵯峨天皇(809~23)の勅願所天皇の奏願によって建てられた寺で、金峯山青龍寺が勅号で、天下泰平国家安穩御
守護の神社である。

外陣左右に四天の像を安置する。内陣を四方より押し奉る秘訣がある。

内陣前に壘石怒命(壘石怒命と共に門から侵入する災厄や疫病を防ぐ門の神と壘石怒命の神像が有る。御戸口秘訣 天上天
下秘訣

・旧記によれば、嵯峨天皇第五十二代(809~23)が皇太子だった頃、常に才子と云し詩賦中国の韻文につとめた。
遙かにこの山の神秀や光輝を聞き、敏才優れた才能の美を感応する所が有つて、夢に大洋の上に方壺を瞻望遠か
に遠くを眺める。ある人が報へて言われるには金峯神社であると。これより嵯峨社位を継ぐの後、大いに錢帛
を散して、經營速やかに成る。そのときの耳が今も伝わっている。

・一書によれば、承暦年中(1077~81)和州宇多郡の城主丹波守盛宗が出羽国に移り、吉野の金峯山をこのと
ころに勧請する。

・縁起によれば、鎮守府將軍兼陸奥守藤原朝臣秀衡は仏法に帰依教を信じ従うし信心深く徳高く、当山の荒廃を
見るに忍びなく再興した。まず本社を建て、次に院内に阿弥陀堂を営む。祓川に三尊如意輪堂、觀音堂、不動堂、
また御在所に如意輪堂等を造る。

・最上近衛少将兼出羽守源朝臣義光は、慶長十一乙丑年(1606)五月十二日巳時御社に参られた。大山の對馬守
秀久と亀ヶ崎の志村伊豆守光安等も共に奉る。同十三年(1608)本社を修復する。以下略。

*本社が東向なのは西を拝するためと思われる。

※西は阿弥陀の西方淨土で死者の赴く場所とされ、山伏の隠語では死人を金と呼んことから、西と金は深く関係する。陰陽五行説で
は西方の特徴を次のように説いている。季節は秋、色は白、金氣、金氣の正位は十二支の酉で、酉は稻を始めとする穀物の結実
收穫を意味する。また金氣は財宝を象徴し、「金生水」の理で水を生み出すもの、水の母である。

○妙覚門(涅槃門)・すべての煩悩を滅却し悟りの境地に至り北門から抜ける。

まとめ

- ・金峰山修験は明治の修験宗廃止まで真言宗を貫いたことが、大師堂に祭る僧侶から知ることができる。修験道は現世利益を肯定する密教を主体とするが、その特徴をよくあらわす観音菩薩を主尊としている。その信仰形態は吉野金峯山を母胎とし、神奈備信仰を中心とする水神信仰と金山信仰である。山麓の青龍寺村から仁王門までは農耕民に直接関わる「山の神」や「弁才天」など水神に関わる諸社がある水分の山として、仁王門より上の中腹の中堂には六道からの解脱に最も力を発揮する如意輪観音を主尊に安置し、祖霊のこもれる山として、そして山上の金峯神社は金剛藏王権現を祀り鉢山の山として構成している。庄内地方には古くから有縁無縁の死者や先祖などの祖霊を供養するモリの山信仰がある。その際地藏菩薩を中心としながらも、必ず観音菩薩を拝する形式がとられている。それは、観音の力で死者が悪鬼にならず祖霊神となって子孫に恵みをもたらすことを願うことで、元来は清水の三森山、三ヶ沢の白狐山、そして修験の山である金峰山や羽黒山など実際の里山で行われていたものが、修験道の廃絶により里の寺院で行われるようになったものと考えられる。
- ・中堂や本社の方位をあえて表記しているところに、金峰山が固有信仰や仏教だけでなく陰陽道を融合した修験道の山であることを表している。
- ・金峰山は金峰萬年草(下)の序にあるように、金峰山は城南の第一の峰で、藩主に寿を獻する山とされている。農耕地帯の庄内平野にあって、壽の源は五穀豊穰である。そのためには降雨と晴天は重要なことで、祈雨祈晴を祈る山は城の南である必要があった。沢山の馬の絵馬が奉納されていることがそれを証明している。